

11 視覚と聴覚の障害が重複している盲ろう児童生徒の 指導の実地的研究

11-1 高い認知能力を示す盲ろう児童の教育課程

筑波大学附属盲学校 星 祐子

1. M児の実態

(1) プロフィール

- ・男児（現在中学部2年生）
- ・家族構成：小学部4年生まで父、母、姉、M児の4名であったが、転校により母親との2人暮らしとなった。
- ・生育歴：3～4ヶ月検診で視覚の問題を指摘された。難聴発見2歳3ヶ月、補聴器装用開始2歳5ヶ月。
- ・教育歴：2歳8ヶ月から難聴児通園施設に入学前まで週2日通園。岐阜県立聾学校に1～4年まで在籍。5年生当初に本校に転入。
- ・視覚障害について：右0.01、左0.01 生来。両網膜色素変性、両黄斑変性、視野狭窄あり。中心暗点があり、ドーナツ状に視野が残っていると思われる。目の前に人や物があることはわかり、はっきりした色なら判別がつく。
- ・聴覚障害について：平均 右99dB 左90dB（補聴器装用時60dB）生来。感音難聴、ドアを強くノックする音やピアノの音、大きな声などには反応する。
- ・コミュニケーション手段：触指文字、触手話、指点字。
- ・学習手段：点字を中心にして状況により触指文字・指点字も使用。
- ・学習形態：特別学級在籍 教科により個別指導、および集団指導を行った。集団指導時には、担任が補助に入り、通訳や指導を行った。
- ・附属聾学校との連携：聴力検査、補聴器の適合検査、および聴覚障害についての配慮点等についてのアドバイスを受けた。
- ・放課後の生活：「銭湯サポート（ボランティア）」の人たちをはじめとして多くの人との関わりを

楽しんでいた。

(2) M児の転入前の実態

転入前の国立特殊教育総合研究所での教育相談、前在籍校見学・懇談等の中でM児の様子と課題について次のような把握をした。

聴覚障害児が小学校入学段階で獲得している言語は2000～2500語程度といわれているが、M児は聾学校へ入学する段階で150語程であったこと、聾学校の中で、コミュニケーション手段としての触手話・指文字を獲得し、点字の読み書きについても学習してきたこと。

そして、小学2年生の国語の教科書に掲載されている「おへそってなあに」の一学習場面においてわからないことばとして、

おへそって（「って」がわからない）

なあに（「なに」ならわかる）

知って

とても

大切な

あなた

いました（「います」はわかる）

をあげ、文意を捉えることは困難であった。

また、点字でのやりとり場面でわからないことばとして、

疲れたかな

この

すごい

もらっていいですか

等をあげていた。

さらに、小学1年生の国語の教科書に掲載されている「たぬきの糸車」の学習時に「タヌキはしゃべるのか」「どうやって糸車を回すのか」といった質問がだされるなど物語教材を物語として捉え

ることが難しい様子だった。

また、話しことばと書きことばとのギャップが大きいこと、生活面でのコミュニケーションはほとんど問題ないが、学習場面ではちがうこと、助詞の意味が分からず、書きことばは単語を羅列するような感じであることなどを前在籍校担任から聞き取った。

(3) M児の転入当初の実態

2002年4月に本校5年生に転入した。毎日が緊張の連続でスタートしたが、その中でM児の実態について次のように捉えた。点字は読めるが、理解できる語彙が少なく、助詞の使い方や語尾変化が習得されていないために、内容の理解は難しく、書きについても、単語を羅列するものの内容は拙く、事実や自らの思いを表現するには至っていなかった。また物語をフィクションとして捉えることはできなかった。

転入当初(2002.4.11)の日記と点字でのやりとり(T:教員、M:M児)は以下の通りである。

きのうのこと

買い物をしてから 帰って おふろを
用意を してから おふろに 行きました。

T「家に 帰ってから 買い物に 行ったのですか。
買い物を してから 帰ったのですか。」

M「そうです。ほくは 十条駅に おりました。
だから 十条に ばいばいをしました。
それから 家に 帰ってから 買い物に
行きました。」

T「誰と 買い物に 行きましたか。」

M「お母さんと ほくと きました。」

T「買い物を してから おふろに
行ったのですね。」

M「家は おふろは いませんので
おふろやさんに 行きました。 毎日
行きます。おふろは 男の 人に
きました。」

(原文：点字)

次は、家庭科ではがきが2枚入るようにつくったウォールポケットについて記した文である。

「家庭科の実習記録」(2002.6)より

きれ はがきを 袋に はいられるのが
しっかり つくりました。

だから とても じょうずですと 思います。

どうしたのは はがきを 2つ 同じ
大きさに はいられるのが じょうずです。

とっても 楽しいです。

棒も はいられました。だから とっても
じょうずだと 思います。

棒を のこぎりに 切った時に すこし
きりが あって 失敗してました。

でも 紙ヤスリで きれいに 直ったので
すこし じょうずです。

(原文：点字)

日本語に触れる絶対量の不足等の中で、理解できる語彙が少なく、文の構成や助詞の使い方、語尾変化等が習得されていないといった実態がうかがえる表記・やりとりである。

反面、生活力や空間概念の高さには驚かされた。日常生活に関する事項はもちろんのこと、学校内の教室の配置は1回でほとんど把握し、それをブロック等で再現することができた。

また、鉄道に関する興味・関心が高く、目を輝かせ、本当に楽しそうに電車の話しをすると共に、造形活動を楽しむ様子が見られた。

2. M児の中心的課題、および配慮事項

このような実態を踏まえて、M児の中心的課題を「概念形成・日本語の獲得」とした。

M児が得られる情報は直接触れることで得られる情報と残存する視覚と聴覚で把握できる「限られた範囲にある不鮮明な」情報である。言い換えるなら、非常に限られた情報であり、多くの情報が入らないばかりか全体像が把握しにくく、何気なく目にしたり、耳に入ってくる情報・テレビや周囲の人からの情報が欠落している、なによりも日本語を耳にするチャンスが決定的に少ない点をおさえおく必要性があった。

このため、学校生活・教育活動においては以下の点に配慮してきた。

- ① 圧倒的に、概念の数が少ないため、当然それに対応する語彙も少ない。そのため、言語のみでなく、直接経験と概念形成とを一体として日

本語の獲得をめざすこと。

- ② 単語ではなく、複雑な状況や抽象概念の獲得には、確実に情報を伝えられる点字による学習に力点をおいてすすめていくこと。新しい概念を整理する時には、繰り返して確かめることができ、かつ、書いていく中で思考を深めることができる点字による学習をすすめていく。M児の獲得してきたコミュニケーション手段を大切にしながらも、日本語の獲得や抽象概念の獲得等にむけて点字を中心に、触指文字、指点字を状況に応じて使うこと。
- ③ M児が興味・関心を示す、M児にとって「意味のある」活動に寄り添いながら指導を展開し、概念を組み立て、広げていくこと。
- ④ 授業内容や行事等については、前もって予告しておく。特に、初めて取り組む行事については、全体像や流れ等については最低限必要なことをM児にわかりやすく説明を行い、概要がつかめるようにする。
- ⑤ 1対1のコミュニケーションが基本とならざるを得ないため、できるだけ多くの場面でコミュニケーションをとり、量を保障すると共に、周囲の様子等についても伝えるようにする。人や物から、わずか少しでも離れてしまえば何もない世界になってしまうがゆえに、できるだけそばにいて、情報を保障していく。
- ⑥ 友だちとのコミュニケーション場面を大切に、対人関係を育てていく。通園施設・聾学校で手話により人との関係を築いてきた財産をもち、手話という豊かな表現をもっているM児にとって、盲学校という中で、指点字によって友だち関係をつくっていくことを保障することが大切であること。

以上、6点を教育活動をすすめていく上での留意点としておさえた。

3. 国語科の指導

国語では、前述した実態・中心的課題・留意事項を踏まえて、目標を以下の4点とした。

◇事物・事象等の概念を理解し、言語を獲得していく。

◇文章の大きな内容を理解する。

◇助詞の使い方や語形の変化、文の構成等を理解する。

◇点字の読み・書きの力をつけていく。

指導の形態としては、個別での指導とし、5年生時は週7時間、6年生時は週6時間を設定した。

指導内容としては、

- ① 文章読解
- ② 文章表記・表現
- ③ 助詞の使用について
- ④ 受動と能動について
- ⑤ 活用形について
- ⑥ 副詞・接続詞
- ⑦ 慣用句
- ⑧ 読書
- ⑨ 辞書の活用

等である。

題材としては、興味・関心が高い、M児にとって意味ある活動ということで、鉄道を中心に取り上げ、それをテコにして、学習をすすめることにした。単に、意欲的に学習がすすめられるというだけでなく、体験と結びつけて、そして体を動かしながら思考していくことが可能であるといった面も考慮してのことである。

具体的指導内容は、以下の通りである。

① 文章読解について

5年生時においては、以下のような題材を提示し、既にもっている知識・概念を土台に構造的に発展させられるようにした。

- ・電車について（山手線、地下鉄、中央線、総武線など）
- ・新幹線について
- ・ブルートレインについて（各種ブルートレイン、海底駅など）
- ・おもしろい電車（ゆりかもめ、箱根登山鉄道、黒部立山アルペンルートなど）

<提示文例1> 2002.5

山手線について

山手線は、東京のにぎやかな町を走っている電車です。

山手線には、たくさんの駅があります。池袋、新宿、渋谷、恵比寿、田端、東京、有楽町などの駅があります。

山手線は、町の中をぐるっと1周する電車です。だから、池袋駅で山手線にのって、ずっと乗ったまままでいると、また池袋駅にもどってきてしまいます。
(原文：点字)

三学期になり、冬季教室の行き帰りに乗った上越新幹線が東京から新潟まで走っていること、積雪を防ぐために線路には温水スプリンクラーが取り付けられていること等を学習した。また、上越新幹線にはトンネルが多いこと、それはどうしてなのかを考え、今までの体験や学習を元に、「山が多いから」という考えに至ったところで、次の教材文を提示した。

<提示文例2> 2003.2

大清水トンネルについて

上越新幹線には、トンネルが22カ所あります。そのトンネルの中で1番長いトンネルは、大清水トンネルです。

大清水トンネルは、群馬県と新潟県の県境の三國山脈の中の谷川岳という山を掘ってつくったトンネルです。1972年に掘り初めて、1980年に完成しました。

大清水トンネルの長さは、群馬県の月夜野から新潟県の越後湯沢までのおよそ22キロメートルです。

東京に向かう上越新幹線が、越後湯沢の駅を出発してすぐに入るトンネルが、大清水トンネルです。トンネルの中に駅はありません。新幹線は、トンネルの中を通過するのに、10分くらいかかります。
(原文：点字)

このように、体験をもとにしながらも、表現をだんだん複雑にし、もっている知識や概念をふくらませ、発展させられるようにした。提示した文を読みすすめるながら、わからないことばや表記を出してもらい、意味や用法を説明したり、対義語を提示したりした。また、反対に、曖昧な理解をしていると思われる言語等について尋ねたりしながら、語彙を増やし、文意の理解をすすめてきた。その際、実物や模型を活用したり、実際に身体を動かすなどして理解がすすむよう努めた。

また、夏休みには、念願だった黒部立山アルペ

ンルートにお父さんと出かけ、学習したことを実際に確かめるなど、家庭の全面的なバックアップがあった。

6年生時においては、M児の関心の高い都道府県（岐阜県、愛知県、滋賀県、京都府、沖縄県、大阪府など）についての説明文を提示した。説明文の内容としては、県の概要、特徴、地形、産業、鉄道等について記したものである。

② 文章表記・表現について

- ・土・日曜日、長期の休み中の日記
- ・行事等における作文
- ・授業等の中での点字でのやりとり

など点字を書く機会をできるだけ多く設定し、やり取りをする中で表記や表現を確認していった。日記の大部分を電車の話が占めており、休み明けには、日記をもとに楽しくやりとりをしながら、文章表記・表現について確認していった。

以下に、入学後約6ヶ月経た頃の日記(2002.10)と1年2ヶ月あまりを経た作文を掲載する。

6日(日)のこと

日曜日は ひろなりが 金曜日 修学旅行に行きました。 だから おみやげを くれるのを 約束なので 大宮へ 埼京線で 行きました。 大宮駅には 埼京線は 上では なくて 地下だった。 ホームから ふたつの エスカレーターで のぼりました。 そこから 改札口を 出て まめのきで 待ち合わせて もらって 少し 話して から バイバイして ルミネに 行って ラーメンを 食べて 京浜 東北線で 帰りました。 どうしたのは 一度 帰って 十条で 買い物をしたから 東十条駅まで 京浜 東北線の 方が いいと 思って いました。
(原文：点字)

修学旅行のこと

(前略)

そして タクシーで 浜松に 行って
東海道 本線で 金谷まで 行って 金谷から
大井川 鉄道に のって 新金谷まで 行って
お弁当, お土産も 買って ほくは おみやげは
エスエルの エヌゲージと はがきを
買いました。そして エスエルに 乗って
千頭まで 行って アプト式レールと
エスエルの 車輪を 見学しました。

その 前 特別に 盲学校で エスエルの
運転手の 所に のって みました。

エスエルは 4両 連結です。

エスエルの 煙は においが
しました。車内 販売が 来ました。

でも, ほくは 何にも
買わなかった。でも みました。

いすは ボックスでした。

トンネルに 入ると 少し こわくなり,
心配しました。

電気が 普通の 列車と 違って 丸い
電気でした。

電車が 黒かったから びっくりしました。

普通の 電車は 黒く ないので
びっくりしました。

アプト式 レールは 16つの 歯の ような
ところ, 3列 並んで いた。16 あります。

長さは 約 198センチで 幅は
16センチでした。

歯の ような ところは 4センチ,
間は 8センチでした。

(後略)

(原文：点字)

このように、二つの作文を比べてみると、自らの体験や思いを表現することができるようになってきたこと、構文力や助詞の使い方等についても進歩の後がうかがえる。

③ 助詞の使用について

読みや書きを通して助詞の使い方を学んできた。たとえば、M兄の書いた「円周走は手をひもを支えて走りました。」(2002.10)の一文をもとにして、実際に円周走のひも、輪、手の関係を確認しながら、やりとりをする中で助詞の使い方や表記を確認していった。

また、対比させながら、学習をすすめてきたいくつかの例を以下に示す。

(5年生時)

「に」「を」の使い方

- ・トーマス「に」客車「を」連結する。
- ・トーマス「を」客車「に」連結する。

「で」「を」の使い方

- ・スプーン「で」カレー「を」食べる。
- ・スプーン「を」カレー「で」食べる。

「で」「に」の使い方

- ・有楽町線「で」池袋「に」行く。
- ・有楽町線「に」池袋「で」行く。

(6年生時)

「を」「も」の使い分け

- ・〇さんは、この本「を」点訳した。
- ・〇さんは、この本「も」点訳した。

「へ」「を」の使い分け

- ・臨時列車は、東京「へ」出発した。
- ・臨時列車は、東京「を」出発した。

こうした助詞の使い方や使い分けについては、実物や模型等を動かしながら実感を伴ってことばと動きを一致させるように努めた。

④ 受動・能動について

(5年生時)

家庭科の実習記録の中の一文「ブロッコリーが袋にはいります」から学習をすすめた。「ブロッコリーが袋にはいる」と「ブロッコリーを袋に入れる」の違いについて実際にブロッコリーと袋を使ってやってみた。同様に、「Mが袋にはいる」「Mを袋に入れる」の違いについて大きな袋を用いて身体を動かしながら学習した。

⑤ 活用形について

(5・6年生時)

日記の記述や実際の学校でのできごとなどを題材にした。たとえば、現在・過去・未来形については

- ・きのう、Aさんは欠席()。
- ・今日、Aさんは欠席()。
- ・明日、Aさんは欠席()。
- ・()は雨がふった。
- ・()は雨がふっている。
- ・()は雨がふるだろう。
- ・()は雨がふるかもしれない。

といった文例を提示した。

⑥ 副詞・接続詞

(5・6年生時)

いくつかの副詞の意味・用法について、体験に裏付けられた文例を挙げて理解がすすむようにした。たとえば、「そろそろ」「やっと」「もう」「まだ」についてを例に挙げる。

- ・そろそろ、ブルートレインが発車（ ）。
- ・やっと、ブルートレインが発車（ ）。
- ・もう、ブルートレインは発車（ ）。
- ・まだ、ブルートレインは発車（ ）。

また、「しかし」、「けれども」、「だから」などの接続詞の使い方について、日記など事実を書き表す中で、学習をすすめた。その中で、

- ・がんばって走った。「だから」2等だった。
- ・がんばって走った。「けれども」2等だった。

など同じ事実でも気持の違いによって使用する接続詞が異なることなども学習した。

⑦ 慣用句

(6年生時)

偶然のできごと、あるいは意図した状況設定の中で、いくつかの慣用句を学習したが、その例を挙げる。

- ・首を長くする

検診のため来校予定の校医の到着をM児が保健室から廊下を見ながら、今か今かと待っていた偶発的な出来事の折に提示した。

- ・肩で息をする

グラウンドを何周も走った後の息が荒い中で、提示した。

- ・足が棒になる

遠足で、山登りをし、かなり足が疲れている中で、提示した。

⑧ 読書

5年生時の後半より読書に取り組んだが、当初は、鉄道に関する読み物や簡単な説明文のみであった。そして、M児のみた「夢」の中身から現実ではないお話しの世界の扉を開け、ハリーポッターに挑戦した。実際に、箒にまたがっても空を飛べないことを何度も確かめたりしながら空想・虚構の世界を知った。同時に、M児と等身大の物語、いかにもありそうな物語である「ヨースケ君」を読み、読書の楽しさを味わった。そして、友だちから「おすすめの本」として紹介された東京と岐阜が舞台になり、ネコが主人公という「ルドル

フ」シリーズをお話しとして楽しみ、さらに、盲導犬シリーズをきっかけに読書の量が急激に増えてきた。

⑨ 辞書の活用

辞書の引き方は自立活動の学習時に学んだ。その後、国語の学習において、意味の分からないことばが出てきた時に活用したり、たとえば、「電車」ということばの定義を自分で考えた後に、辞書を引き、辞書ではどのように説明されているのか調べるなど、知っている語がどのように定義されているのかを確かめるなどの使い方も試みながら、少しずつ活用を図った。

こうした国語の学習の中での「意図的な取り組み」と共に、他の教科学習や生活の中での点字や触指文字をはじめとするやりとりや学校生活以外での多くの人との会話、いわば「日本語のシャワー」を浴びながら、M児は事物・事象等の概念を一つひとつ獲得し、それらに対する日本語の語彙やその概念間の関係（因果関係・時間的關係等）やそれらの関係を表現する助詞や文章表記を身につけていった。

4. 社会科の指導について

景色を見たことがない、日々生活の中に充満している日本各地の情報が入ってくることがない、絵本やテレビなどで歴史的な物を何気なく目にしたり、耳にしたりすることがない中で、空間的拡がりや時間的拡がりを捉えさせたいと考えた。具体的な指導目標は次の通りである。

◇東京都や日本の広がりを理解する。

◇日本の地形や各都道府県のおおよその位置をつかむ。

◇地図を理解する。

◇世界の広がりや国々について知る。

◇身近なところから歴史（時間的流れ）を理解する。

学習形態は、個別指導で行い、5・6年生時とも週2時間の指導を行った。

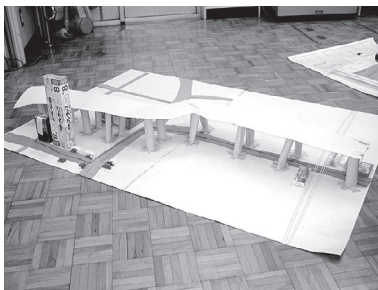
5年生では、

- ・学校周辺の様子と地図づくり

- ・都心の電車路線図づくり
- ・東京の様子と立体地図づくり
- ・日本の広がり

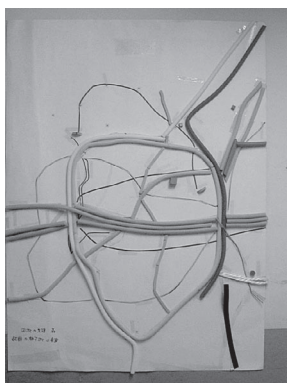
を学習した。

最初に、学校周辺の地図づくりに取り組んだ。興味・関心を示したスクールバス（毎日の登下校に利用）の経路を実際に歩いて、通りや建物等を確かめながら立体地図上に表現することを行った。駅に出向き、出口を調べたり、スクールバスの経路や高速道路の位置、都電の駅などを確認したりしながら、立体地図上に表現することを行った。説明と実際に歩く中で、高速道路のカーブを地図上に再現することやバスの経路を的確におさえることができた。



学校周辺の地図

都心の電車路線図づくりでは、国語の「電車について」の学習を元にしたたり、実際に地下鉄路線を乗り継いだり、都電に乗る中で、駅などの位置を理解し、路線図を作り、交通網から東京都の特徴や広がりを学んだ。



都心の電車路線図

これら学校周辺の地図づくり、都心の電車路線図、東京の広がりの学習においては、実際に出かける機会を多く設定し、空間的広がりが実感を伴って捉えられるように努めた。

また、東京都の立体地図づくりでは、都心部と比較しながら、東京都の山間部に出かけ、東京都の広がりや地形を実感させ、空き箱や積み木をビルに見立て、立体地図に再現すると共に、既製の地図との対比を行い、地図学習への導入とした。



東京都の立体地図づくり

また、国語の「新幹線について」「ブルートレインについて」の学習や夏休み等に出かけたところを地図上で確認しながら、それぞれの位置や日本の広がりを学んだ。北海道、青函トンネル、東京、岐阜、大阪、瀬戸内海、四国、関門海峡など、興味や関心が高い地方や出かけるなどした場所についての正確な位置の把握から出発した。行った先々では、特徴ある産物に触れる、名産品を食べるなどして印象づけてきた。そうした積み重ねの中で、日本の広がりや都道府県のおおよその位置関係をつかんだ。

6年生では

- ・世界の広がり
 - ・自分史・家族史・学校史・鉄道史
- を学んだ。

イラク戦争がきっかけとなり、世界の国々についても、興味を示し始めたので、イラクを初めとする日本とは異なる地続きの国々が多く存在する事を学んだ。さらに、アジア、ヨーロッパなど世界には大小さまざまな多くの国があることを地図で調べた。

歴史については、現在から時間をさかのぼって時間的流れを捉えさせることを試みた。「先生は、徳川家康に会ったことがあるか？」と尋ねるなど、イメージーションを拡げていける範囲が狭い中で、身近に感じられる範囲、拡げていけるところといった観点で学習をすすめた。

まず、現在から自分の誕生までのことや家族のことを調べ、年表を作り、記していった。その際、乳幼児期の洋服なども活用した。点字用紙1枚に5年分の史実を記し、枚数によっても年を捉えることができるようにした。

そして、身近である学校について調べた。本校教員に聞き取り調査を行い、校舎や寄宿舎の改築、体育館建設などについて調べることから出発し、本校教員が綴った戦時中についての文をもとに、かつて大きな戦争があり、多大な被害を受けたこと、学校疎開をしたことなどを学んだ。また、校内の銅像、各種点字機、点字制定以前の各種文字などを活用しながら、毎日使用している点字が制定されるまでの苦労などにも思いを馳せた。

さらに、楽しみにしていた鉄道について調べ、年表に付け加えながら現在からおよそ150年をさかのぼった。興味・関心に沿いながら、再現された鉄道開通時の線路・駅ホーム（旧新橋停車場）、汽車道、馬車道、赤煉瓦倉庫、再現された横浜港駅プラットホームなど歴史的建造物や史跡等を活用しながら、できるだけ実感をもって把握できるように努めた。M児は、「日本の鉄道100年」の本を図書室で借りて、必要と思われる箇所を抜き書きするなど、意欲的に学習していった。

前述したように、まずは、自分や家族、そして、学校について記していった年表に、鉄道についての事項を書き加えていく中で、事柄の相互関連等にも気づき始めた。

地下鉄やバス路線の発達に伴い、都電が姿を消していったことに自分から気付くなど、部分的ではあるが、歴史的現象の相互関連を捉えることができた。

また、西洋の鉄道開通に比して日本の鉄道開通が数十年遅れたこと、鉄道開通当時は日本には技術がなく、イギリスから技術者が来日したこと等から「他の国とは×だったと聞いたことがある」と「鎖国」に考えが至るなど、今まで獲得してきた知識をもとに、「どうしてなのか」について思考をくぐらすことができるようになった。

しかしながら、その学習時、すり減った線路をひっくり返して裏面も使うといったところで、

ひっくり返す時には両端をもってひっくり返す、線路は始点から終点まで長い1本であると思っていたことがわかり、改めて情報の欠落を実感した。後日、実際に線路を触り、つなぎ目の存在を知らせたが、つなぎ目を触った時に、突然、「わかった、わかった、電車に乗っている時に、ゆれるのは、このつなぎ目の所だね。」と興奮気味に手話と指文字で伝えてきた。そして、その帰り道に乗った電車の中では、つなぎ目の箇所では電車が揺れるたびに、「つなぎ目」、「つなぎ目」と納得顔で発信をしていた。今までの経験と得た知識とが結びつき、確かな知識として構造化されていた一つの事例である。



社会科見学で再現された鉄道開通時の線路を観察している様子

以下は、M児の書いた年表の一部分である。

2003年	M（自分の名前）6年 イラク 戦争が ありました。 半蔵門線 全線 開通。
2002年	M 5年 盲学校に 転校した。
2001年	M 4年 お母さんの お父さん 死んだ。
2000年	M 3年 お父さんの お父さん 死んだ。 南北線 全線 開通。
1999年	M 2年 新幹線 700系 のぞみが 登場した。 (原文：点字)

1875年	5月 楽善会ができた。 募金を始めた。 京都から神戸まで鉄道ができた。 新橋 横浜間 初めて快速ができた。
1874年	大阪から神戸まで鉄道ができた。
1873年	初めて貨物列車ができた。
1872年	新橋から横浜まで初めて 鉄道ができた。 品川から横浜まで仮運転した。 新橋駅のホームの 長さは151.5メートルで 幅9.1メートルでした。 横浜で初めてガス灯ができた。
1871年	新橋 停車場ができた。 石屋川 トンネルができた(大阪府)。 初めてのトンネル。

(原文：点字)

5. 実践の中で確かめられたこと

以上、M児の小学部2年間の教育課程とその実践について国語や社会を中心に報告してきたが、取り組みを通して、以下の点を学んだ。

- ① 絶対的語彙力不足の中で、言語のみによる説明は実感を伴わず、理解されにくい。直接経験と概念形成とを一体として日本語の獲得をめざすことが大切である。「そうなんだ」「わかった!」といった感情と共に獲得させた概念は定着するもので、それは経験や情報が少ない盲ろう児にとっては意図してつくっていかなければ獲得が難しいことである。
- ② 興味・関心のある、児童にとって「意味のある」活動から出発することで、自分の中で構造化されていることを土台にして積み上げてい

く、広げていくことができる。課題に子どもを合わせるのではなく、子どもに合わせて課題を設定していくことと確かな見通しをもって、教材を提示していくことが大切である。

- ③ 一つの概念を獲得するには、かなりの時間を必要とする。学習内容を精選し、優先順位をつけての課題の設定が必要である。

本稿への写真掲載については、M児のご家族の快諾をいただいていることを謝意をもって付す。

(参考文献)

- 中澤 恵江 (2004年)：「盲と聾が同時に重複した『盲ろう』の指導の最前線」季刊 特別支援教育 No.9 文部科学省初等中等教育局特別支援課 58-61
- 中澤 恵江 (2001年)：「盲ろう児のコミュニケーション方法」国立特殊教育総合研究所研究紀要 第28巻 国立特殊教育総合研究所 43-55
- マイケルT. コリンズ (2000年)：「盲ろう児のための教育」盲ろう教育研究紀要第5巻 社会福祉法人 全国盲ろう者協会 55-67
- 伊藤 泉 (2000年)：「7名の盲ろう児達と共に」盲ろう教育研究会紀要第5巻 社会福祉法人 全国盲ろう者協会 17-32
- 今枝 みどり (2001年)：「ぼくと、手で話そうよー盲ろうの子どもとその仲間たち」重度・重複障害児の事例研究第24集 国立特殊教育総合研究所重複障害教育研究部 1-7